
恋する狐と男の子

葵空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する狐と男の子

【Nコード】

N3956C

【作者名】

葵空

【あらすじ】

この春に高校生になったばかりの山内凜。彼はある日、突然降ってきた天気雨から逃れる為に森の中に入ります。そこで怪我をした一匹の狐を見つけ、家に連れ帰って手当てしました。翌朝になるとその狐はとても綺麗な女性になっており、おまけに凜に一目惚れしたのでここに住むと宣言します。妖狐と人間による、時にはシリアスを交えるラブコメディー。

第1話 一方的な出会いと恋

時刻は深夜の3時頃。

まだ太陽は出ておらず、淡い月明かりが地に降り注いでいる。

そして、その月明かりさえわずかしか届かぬ鬱蒼とした森の中で、二つの影が動いていた。二つの影は時折交差しながら、森の中を縦横無尽に駆けていく。

次第に、影の動きに変化が生まれた。

一方の影が、残り一方の影を追い詰めていくような動きになる。

「ふふっ・・・この程度の力で、私に勝てると本当に思っているの？ いい加減諦めたら？」

追い詰める側の影が、追い詰められる側の影に向かって話しかける。

「あの御方の帰還要請にも従わず、こちらで気休に行動する貴女を連れ戻すのが、私に与えられた任務です！ 諦めるなどありえませんか！」

それを聞いて、追い詰める側の影はため息を吐く。

「何度も言ってるでしょう？ 本来、私達の一族は自由が信条。一族全てをまとめようとしているあいつが異質なのよ。それに、私とあいつは同格よ。従う筋合いもない」

「何を言われようと、私の任務は変わりません！」

「あらあら、意地っ張りなことで・・・」

あくまで冷静な一方に対し、もう一方は声を荒げっ放しだ。

「まあ、^{ひずい}緋翠のそんなところは結構気に入ってるけど・・・寝る所を邪魔されて、今日は虫の居所が悪いの。諦めないなら、手荒い事をしたくなっちゃいそうなくらいに、ね？」

そう言った瞬間、辺りに異質な圧迫感が満ちる。

それを感じ取って、緋翠と呼ばれた影は顔を歪める。しばらくそのまま対峙していた二人だが、絶えることのない圧迫感にやがて緋翠が折れた。

「……今日の所は引き下がりました。ですが！次に来る時は、紗那殿を必ず連れ戻します」

「ホントは完全に諦めて欲しいんだけど、まあいいか。そうと決まれば、早く帰ってね。緋翠のせいで寝不足なんだから」

紗那と呼ばれた影は、その言葉を引き出すのを待っていたかのように、異質な圧迫感をあつさりと引つ込めていく。そして圧迫感の消失と共に、悔しげな表情を残しながらも緋翠の姿は辺りから消え去っていた。

「……よしよし、やっと帰ってくれたか。手加減しすぎてかすり傷出来ちゃったし、早く寢床でゆっくり休もつと」

紗那はそう言つて左腕をさすりながら、塹にしているこの森一番の大樹へと向きを変えて歩き出した。

そして、大樹が目に入つた瞬間だった。ぶうん、という低い音が鳴った。

紗那の足元の地面から、光が生じていた。

「！？やばっ、侵入者対策の罫解除してなかつ」

全てを言い終える前に、紗那の意識はまどろんでいく。

（あー……寝ちゃうのはいいんだけど、ちゃんとした寢床で……寝た……かつ……た）

そして、意識が完全に闇に包まれた。

少年は歩いていた。彼の名前は山内凜^{やまつち りん}。この加衣市^{かい}に住み、市内にある私立加衣学園に通う至つて健康な男子高校生……なのだが、女の子に間違われる事が非常に多かった。

何故かというと、まずは凜という名前。この一文字だけでは、女性の名前というイメージが強い。そして、凜の容姿が直接会つた人にすらそのイメージを与える。体つきは華奢で、顔立ちが中性的。さらには、声も男にしては高い部類に入る。それらの要素が合わさり、

『男の子っぽい印象がある女の子』という答えを導き出すのである。凜は今、学校から自宅に帰る途中だった。

「あ、そう言えば今日ってスーパーの安売りの日だったっけ。あと2、3日分は材料残ってるけど、安い時に買っておかないとなあ」そう呟くと、行き先を自宅からスーパーへと変更する。

何とも所帯染みた言葉だが、それも仕方のない事だ。

凜の両親は共に学者であり、研究の為に家を留守にしてあちこちを飛び回っている。それ故、必然的に凜は一人暮らしをしていた。とは言え、両親は一応大学に所属しているので給料が出るし、料理や家事の腕前もそれなりに上達しているので、そこそこ充実した一人暮らしの日々を送っていた。

「今日の夕食何にしよう・・・昨日はコロッケだったし、今日は魚にでも・・・」

歩きながら夕食の献立について考えている凜の頭に、何かが降ってきた。手をやると、髪が少し濡れている。

「・・・お天気雨？」

顔を上げると、空は晴れているのだがぽつぽつと水滴が降ってきていた。

「すぐに止むかな」

傘など持っていなかったので、気にせずスーパーに向かって歩き続ける。

だがその間にも天気雨の勢いはどんどん増していき、しまいには降り注ぐ雫が痛い程になっていた。

さすがに凜も慌て、スーパーに向かって走りながらも雨宿り出来そうな所を探す。

「はあ、はあ・・・もうずぶ濡れだよ・・・はっ、はっ・・・ん？あそこは・・・」

しばらく走ると、凜の視界にあるものが入り込んできた。森だ。もう長いこと人の手が入っていないような、鬱蒼とした森が目映る。どうして街中に森があるのかというと、この加衣市の西側から北側

にかけて山が横たわっており、その山から突き出た森を取り囲むように住宅地が形成されているからだ。切り拓いても良かったのだが計画が何度も頓挫し、結局はうやむやのまま手付かずになっていた（森の中だったら、木がある程度防いでくれるかな・・・まあこのまま雨に打たれるよりはマシか・・・）

そう思い、凜は森の中へと駆け込んでいった。

「うう・・・何だろ、この感じ・・・」

凜は森の中に入った事を少し後悔し始めていた。

確かに、当初の目的であった雨よけにはいくらか成功した。しかしこの森、言葉では上手く言い表せないのだが何となく居心地が悪いが耐えられない程ではないし、空をも覆い隠す程に生い茂った木々のせいでそう感じるだけだと我慢する。

「はやく雨止まないかな・・・あれ？」

近くから、物音が聞こえた気がした。

思わず緊張して耳を澄ますが、聞こえてくるのは雨が頭上の葉を打つ音だけだ。

気のせいかと思った矢先に、再び何か聞こえた。

（雨音じゃないし・・・動物か何かかな？街に近いとは言え森の中だし・・・）

気になった凜は、音のした方へとゆっくり慎重に歩いていく。

草むらを掻き分けて少し進むと、開けた場所に出た。

「・・・大きい・・・」

凜の眼前には、大樹がそびえ立っていた。森にある他の木とは比べ物にならない。

幹は大人が数人がかりでも囲めぬ程に太く、高さは恐らく建物の4階から5階に相当する程。

この場所が開けていたのは、大樹が日光を遮って他の樹木が育てな

いからだろう。凜はその壮大さに見惚れていたが、本来の目的を思い出して辺りを見回す。

「たぶんこの辺から聞こえたと思うんだけど・・・」

歩みを再開して辺りを見回していると、大樹の、凜がやってきた方向とはちょうど反対側にそれはいた。

黄金色の体毛を持つ狐が、地面に横たわっていたのだ。

「寝てるわけじゃ・・・ないよね？」

死んでしまっているのかと思ったが、近付いてみると狐の体が呼吸により上下しているのが分かった。

さらに近付き、すぐ隣にしゃがみ込んでも狐は反応を示さない。

「あ、怪我してる」

その体をよく見てみると、もう出血は止まっているようだが左前足に傷があった。

「こんなに近付いても動かないって事は、たぶんこの傷のせいで消耗してるんだよね・・・」

その時にはもう、凜の頭からは買い物に行く事などすっかり抜け落ちていた。

狐をそつと抱きかかえ、雨に濡れないように制服の上着を被せて、再び行き先を自宅へと変更して走り出した。

凜はせっせと家の中を動き回っていた。

「包帯と・・・あ、舐めちゃうかもしれないし、人間用の消毒薬じやまずいかな。確か調理用のお酒があったから、そっちにしよう」

あの後、走っている途中で天気雨も止み、凜は無事に自宅であるマンションに辿り着いていた。

動物病院にでも連れて行った方が良かったのかもしれないが、この辺りに動物病院は無い。帰ってきてから電話帳で探してみた所、見つけはしたのだがいくらか距離があり、着くまでに診察時間は終了

してしまいそうだった。

「まだ起きないか・・・取り合えず消毒して包帯だけ巻いちゃおう」
テーブルの上で横たわったままの狐の左前足を手に取り、酒を染み込ませたガーゼで消毒をし、包帯を丁寧に巻いていく。

「これでよしつ。・・・でも、可愛いなあ・・・」

突然何を思ったのか、狐の体に頬をすり寄せ・・・

「ふさふさ」

と、毛の感触を楽しみ始めた。

この突然の凶行には理由がある。

凜は幼い頃から、ふさふさした毛を持つ可愛い動物が大好きだった。そんな事だから女の子に間違われるのだと、昔は 今となって諦めているので言わないが 周囲の者達から何度も言われた経験がある。また、入学当時にクラスメイト達の間で話題になったエピソードもある。

市立加衣学園の入試は、英語・数学・国語の筆記試験と学園長直々の面接によって構成されている。

凜も当然それを受けたのだが、問題の出来事は面接の際に起きた。学園長がこの学校に入ったらどんな目標を立てるかを聞いた。何処でもあるような、ありふれた質問だった。

『はい。毛がふさふさしている可愛い動物と触れ合う機会を増やす事です』

凜はそう答えた。確かに答えたのだ。

どう考えても、普通の学校の面接で言う内容ではない。これが仮に獣医大学の面接だったとしても、場違いな内容だっただろう。

学園長もしばらく呆気に取られていたのだが、我を取り戻して淡々と面接を進めていった。

面接終了後に学園長は悩んだ。面接だけを見るならこの少年は落とすべきではないかと思ったのだが、筆記試験の方は全科目で100点満点中90点をキープしていたからだ。悩みに悩んだ末に、動物の事を可愛がる優しい心の持ち主なのだと自分を無理矢理納得させ、

凜の合格を決めたのである。

どこで知ってきたのかは分からないが、クラスメイト達は2週間に渡ってこのエピソードで雑談し続けた。その結果として、入学したばかりで面識の無かったクラスの雰囲気はかなり良くなったのは、予想外の出来事だったと言える。

「すごい柔らかくて気持ちいいな」

そう言つて、なおも狐の体に頬をあてていた。

行為は約5分間に渡り、ようやく凜は止まった。

「あんまりベタベタすると可哀想だし・・・もう止めておこう・・・
・・・うん」

どこからどう見ても未練がたっぷりと残ってはいたが、なけなしの自制心を働かせていた。

そして自分の部屋にタオルケットで寝床を作り、そこへ狐をそつと寝かせた。自分の夕食やその後片付けを済ませ、その日は凜もそのまま眠りについた。

「・・・て・・・た・・・」

誰かの声が聞こえる。

「・・・きて・・・・・・ら」

声と共に、体が揺すられる感覚が生まれる。

「起きてったら！」

今まで以上に体が揺すられた。その拍子に体はベッドの上をゴロンと転がり、ベッドが隣接する壁にぶつかった。

その衝撃で凜はようやく薄目を開ける。目を開けて窓の方を見ると、まだ少し薄暗くはあったが日が昇りつつあった。時計は午前6時前を示している。

（・・・・・・起こされた？誰に！？）

凜はようやく事態の異常さに気付き、急速に意識を覚醒させた。

「やっと起きたみたいね」

ベッドの傍らには女性が立っていた。

透き通るような金髪で、モデルのような体形。顔立ちも美人と言えるもの。

絶世の美女という言葉はこの女性の為にあるのではないかと、そう思える程に綺麗だった。

おまけに見慣れない衣服を着ている。凜が知っている範囲では、神社の巫女さんが着ているものが一番近いだろうか？だから凜の頭は瞬時に結論を出す。

「・・・これは夢だ。うん。きっと、たぶん、おそらく・・・夢に違いない」

すなわち、現実逃避という名の結論を。

「失礼ね、夢なんかじゃないわよ？」

ペチツという乾いた音と共に、女性の指が凜の額に激突した。かなりの痛みが凜を襲う。

痛みによって現実逃避から引き戻された凜の視界には、やはり先程と変わらぬ光景があった。

場所は、凜の部屋に間違いない。家具やその他小物の配置は昨日とまったく変わっていない。

しかし、この女性は誰なのか？という疑問が湧いてくる。凜の知り合いにこんな人はいなかったはずだ。仮にいたとしても、今ここに居る理由はない。

「えっと・・・もしかして、泥棒の方ですか？」

結局、考え付いたのはそれしかなかった。

「いたっ!？」

次の瞬間、額を再び痛みが襲っていた。先ほどの倍くらいの威力。最早、でこピンなどと生易しい言葉で表せるレベルではない。

「この私を、よりもよって泥棒扱いとは、失礼にも程があるわ」

「いたた・・・ええと、でもあなたに見覚えはありませんし、そもそも何で家の中に？」

「見覚えが無いのは当然ね。君が私のこの姿を見るのは初めてだもの。そして、何故家の中にいるのかと言えば、君が私を連れ込んだからよ」

「つ、連れ込んだ!?」

そんな事をした覚えは凜にはまったくない。一体何がどうなっているのだろうか?

「そうよ? 気がついたらこの部屋にいたの。となれば、私の意識が無い間に君が連れ込んだとしか考えられないじゃない」

「そ、そんな・・・」

単に連れ込むどころか、意識の無い間に連れ込むという卑劣極まりない行為。

本当にそんな事をしてしまったのだろうか? と、凜は青い顔をして考え込む。だが、昨日の出来事はきちんと覚えている。朝起きたら学校に行き、放課後スーパーに買い物に行く途中でお天気雨が降ってきて、雨宿りの為に森に入って、そこで怪我をしている狐を見つけて、家に連れ帰って手当てをして・・・

「そうだ!」

「うわっ!?!」

思った以上に大声になったらしく、女性は突然の大音量にビックリしている。

「そうだ、狐! あの狐は!?!」

タオルケットで作った寢床に視線を移すが、そこに昨日の狐の姿は無い。

「すみません、狐を見ませんでしたか? そのタオルケットに寝ていたんです。毛は金色で、左前足に包帯を巻いている筈なんですが」
数秒前までのやり取りも忘れ、必死になって女性に尋ねる。

「・・・ふふふつ。あははっ、ははっ、面白いね君は。こんな状況でそんな事が言えるだなんて・・・ふふっ」

何が可笑しかったのか、女性は突然笑い声を上げ始める。
だが、凜は必死だ。

「し、真剣な話なんです！気がついたらこの部屋に居たっていうなら、何か知りませんか！？」

「知ってるわよ」

「そうですか・・・え？」

凜は少々間抜けな声を出す。聞いてはみたものの、自分の期待する答えが返ってくるとは思っていなかったからだ。

「そのタオルケットに寝てて、毛は金色、左前足に包帯。その狐なら、君の目の前にいるわよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「だから、君の目の前。つまり私がその狐よ」

「僕は真剣な話をしているんです。本当に、何か知っている事は、言葉を続けようとしたが、女性がそれを遮るように腕を眼前に突き出してきた。」

「ほら、この包帯。君が巻いてくれたんでしょ？」

女性が突き出したのは左腕。その手首の辺りには包帯が巻かれていた。それは確かに、昨日使った包帯と同じ種類のようなだった。

「こんな包帯どこにでも」

「これならどう？」

「なっ・・・・・・・・！？」

凜は絶句した。女性の頭とお尻から、狐の耳と尻尾が覗いて見える。女性は手足を動かすどころか、身動き一つしていなかった。それなのに、凜の目の前で突然生えてきた。

「・・・・・・・・・・」

何か言おうとするが、口がばくばくするだけで言葉にならない。

「これで信じた？真正正銘、君が言う狐は私の事よ。ああ、そう言えばまだ名乗ってなかったわね。紗那よ、私の名前は紗那」

「あ、どうもご丁寧に。僕は山内凜です」

礼儀正しく躡けられた凜は、女性が名乗った事につられて自分も名乗ってしまう。

「そっか、凜っていうんだ。これからよろしくね、凜」

「はい、よろしく願います。・・・って、これから？」

何か不吉な言葉が聞こえた気がした。

「うん。私、凜に一目惚れしちゃったから、これからここに住むね」
紗那と名乗った女性の言葉を聞きながら、凜は自分の今までの日常が崩壊していくのを感じ取っていた。

第1話 一方的な出会いと恋（後書き）

皆様初めまして、葵空と申します。ここまで読んだ頂き、誠にありがとうございます。

今までに興味として、無駄に設定だけ膨らませたり、出だしだけ書いたりしては自己完結してはいましたが、こうして投稿するのは人生で初の経験です。

さて、この「恋する狐と男の子」ですが話としては『普通の動物だと思って連れ帰ったら妖怪やモンスターの類だった』という結構よくあるものだと思います。

似たり寄ったりの作品にならぬように努力していきたいと思っていますので、皆様のご意見やご感想をお願い致します。

第2話 幼馴染と狐耳

朝の出来事から2時間程が経過していた。

目が覚めたら狐が女の人になっていたなどという非日常を、凜は出来れば信じたくなかった。

しかし、最早信じるしかない。

紗那はあの後、耳と尻尾を自由自在に動かし、作り物ではない事を証明してみせた。

さらに、それでもまだ半信半疑だった凜に決定的なものを見せ付けた。

一瞬にして、狐の姿に変わって見せたのだ。金色の体毛を持つその狐は、紛れも無く昨日連れ帰った狐だった。

昨日の狐「紗那」という事実は信じざるを得なかった凜だが、疑問に思う事は他にいくらでもあった。紗那は意外にも、その疑問の一つ一つにきちんと答えてくれた。

それによるとまず、紗那のような存在 あやかし 妖 ようかい と言うらしい が暮らす妖界という名前の世界が存在している。それに対して、凜達のような人間が暮らす世界は人界 じんかい と呼ばれている。二つの世界は表裏一体のようになっている、大まかな地形だけならほとんど変わらないそうだ。人間側は一部を除いて妖界の存在を忘れてしまったが、妖側はそうではない。人界との行き来も比較的簡単に出来るらしい。

人間に人種という区分があるように、妖にも種族 しゅぞく という区分が存在していて、紗那の出身は妖狐族 ようこぞく という種族。要するに狐の妖怪だ。

また、確かに人間には無い特殊な力を持つてはいるが、昔話や伝承のように妖が人間を食料とする必要は無いと言う。

そして、何故人界に来ていたのか？一言で言うなら『飽きちゃった』からだそうだ。

妖の寿命は人間に比べて遥かに長く、そのせいか変化の幅があまり無い。紗那はそんな暮らしに飽きて、300年程前からずっと人界

に滞在しているらしい。

「取り合えず、あと一つだけ聞きたい事があるんですけど・・・」

「なに？スリーサイズと体重以外なら、何でも答えてあげるわよ」

紗那はさつきからずっとこの調子だ。その綺麗な顔に微笑をたたえ、凜を見つめ続けている。

「あの・・・そんなに見つめられると・・・」

凜は人見知りをするタイプだ。おまけにこんなとんでもない状況という事もあり、先程からかなり緊張して喋っていた。

「凜は、私なんかに見られるのは不愉快だね・・・ぐすっ」

「あの、そうではなくて・・・」

「ふふっ、冗談よ。さ、続けて？」

このからかい方もさつきから変わらない。

だが、女性の扱いなどには全く慣れていない凜は、紗那の嘔泣きの度にうろたえていた。そして発端であった見つめる行為も、結局はぐらかされてそのまま続いている。

「えっと・・・紗那さんは何であんな所で倒れていたんですか？」

瞬間、紗那の微笑をたたえていた表情に変化が生まれた。

「ああ、それはね・・・ええと・・・」

どんな質問にもすんなりと答えていた紗那が、急に言い淀んでいた。

「言いにくい事なら」

「うっん、そんな事ないの。えっとね・・・凜も見たと思うんだけど、あの森にすっごく大きな木があったでしょ？」

「はい。紗那さんが倒れてた傍に、立派な木が」

「そう、それ。妖力を使ってちよっと弄って、そこを埒にしたの。それで埒を荒らされない様に、侵入者、つまり私と同じ妖用の罫を仕掛けてあったんだけど・・・自分で、引っ掛かっちゃったのよね」

「・・・え？」

「だから、自分で仕掛けた罫に・・・引っ掛かったの・・・」
凜は呆然としていた。さすがに何と言っていいのか分からなかった。

「……………凜、私の事馬鹿な女だと思ってるでしょ？うう、凜に嫌われた…………ぐすっ」

そんな凜の様子を見て、紗那は俯きながら震えていた。今度は本当に泣いているようだ。

「そ、そんな事ありません！紗那さんの事を嫌ってなんかいません！」

「本当…………？」

「本当です！」

「そっか、ありがと　でも、好きって言ってもらえないのは残念だな」

紗那は一転して笑顔を見せる。その目には涙の跡すら無い。

「え？あ…………」

「ふふっ、ごめんね？涙は女の武器だから」

また騙されたのだと気付いた凜は何か口にしようとするが、紗那がそれより先んじた。

「でも、凜に一目惚れしたっていうのは本当だからね」

「あ、う…………」

異性に好意を示される事に慣れていない凜は、それだけで何も言えなくなる。

「凜って可愛い」

「し、紗那さん！」

「だから、その反応が可愛いんだってば」

凜がさらに何か言おうとした時だった。

ピンポン！

玄関のチャイムが鳴った。

山内家のチャイムが鳴る数分前。マンションの共用廊下を制服姿の少女が歩いていた。

女性にしてはかなり背が高く、180cm程はあるように見える。

茶色がかった髪をポニーテールにしており、こちらも茶色がかった瞳を持つ目は目じりがつりあがった、所謂つり目というやつだ。一見した感じでは、気の強そうな印象を受ける。

「凜ってばどうしたんだろ？いつもなら、マンションの下でボクのこと待ってるのに・・・寝坊でもしたのかな？」

そう呟きながら廊下を進む少女の名前は黒桐澄香^{くろぎりすみか}。このマンションに住む山内凜の幼馴染であり、同じ学園に通うクラスメイトでもある。幼馴染という事を抜きにしても二人は非常に仲が良く、毎朝一緒に通学していた。

普段はマンションの共用玄関を出た所で待ち合わせをしているのだが、今日に限って凜はそこにいなかったたので、部屋まで迎えに行く事にしたのだ。

少し歩くと、澄香は目的地に到着した。『山内』と掲げられた表札の脇にあるボタンを押す。

ピンポン！

・・・・・・・・・・・・・・・・

「？」

チャイムを鳴らしても反応がない。

ピンポン！

・・・・・・・・・・・・・・・・

もう一度鳴らしてみるが、やはり反応がない。

「・・・やっぱり寝坊かな？」

そう思った時だった。ドアの鍵が開錠される音が聞こえた。

「す、澄香。おはよう」

「おはよ、凜。何かあったの？」

慌てた様子で出てきた凜を見て、澄香は疑問の声を上げる。

「い、いや。何にもないよ。それよりどうしてここに？」

「どうしてって・・・待ち合わせの時間になっても凜がいなかったから、迎えに来たんだけど」

「ああ・・・そっか、ごめん。すぐ準備してくるから、ちょっと待ってて」

「うん、分かった」

澄香がそう言い終える前に、凜は既にドアを閉めていた。さらに鍵をかける音がする。

「・・・どうしたんだろ？」

凜のこんな様子は、今までに見た事が無い。

「ドアを閉めるだけならまだしも、鍵までかけるなんて・・・
・・・怪しい」

長年の幼馴染の勘というやつで、凜が何か隠しているという結論に澄香は達していた。そうとなれば、何を隠しているのか確かめなくなるのが人の性分というものだ。

「幼馴染のボクに隠し事なんて・・・」

澄香はポケットから鍵を取り出す。このマンションに入る時にも使った合鍵だ。

それを鍵穴に差し込み、回す。

カチャツという音が鳴り、ドアは再び開錠された。

そーっとドアを開けて中に入る。

「しゃ・・・ん。はや・・・うちに・・・さい」

玄関からでは姿こそ見えないが、澄香の耳には凜が何かを話す声が聞こえてきた。

「凜！何やってるの！？」

「う、うわっ！？」

澄香の大声が家の中に響き渡った。

それを聞いた凜は、慌てて玄関へとやって来る。

「澄香、どうして中に！？」

「今日の凜、ホントに変だよ？ボクが合鍵持つてる事なんて知ってるでしょ？」

「あ・・・」

「凜、ボクに何か隠してるでしょ？」

「そ、そんな事は・・・」

明らかに動揺している凜を見て、澄香は確信しつつあった。

「ボクと凜は幼馴染だよね？そのボクにも隠さなきゃいけない事なの？」

「隠してる事なんてないってば」

「嘘を言わない！そんな様子で言っても誰も納得しないよ」

「うつ・・・」

「さあ、何を隠してるのか白状」

澄香がさらに問い詰めようとしたその時、リビングに通じるドアが開いた。

「凜、大きい声でどうしたの？」

「なっ・・・あなた、誰！？凜の家で何してるの！？」

「紗那さん！？あっちに行つて下さいって言つたじゃないですか！」

そこに立っていた紗那を見て、澄香と凜はそれぞれ驚愕する。

「だって、大きい声で言い合ってるみたいだったから、何かあったのかなって」

「何でもないですから！取りあえずあっちに」

肩に置かれた澄香の手により、凜の言葉は遮られる。

「凜・・・どういう事かな？」

「いや、澄香・・・これには、ふかい事情があつて」

「ふかい事情？」

「凜がね、意識の無い間に私をここに連れ込んだの。それで、一晩同じ部屋で過ごしたのよ」

澄香が凜の言い分に耳を貸そうとした瞬間、全てが壊れる音がした。

「紗那さん、そんな誤解を招く言い方は止めて下さい！」

「・・・ボクにちゃんと説明してもらおうか、凜？」

「だ、だから、それは誤解なんだってば！説明ならするから、取りあえず落ち着いて・・・お願いだから」

「じゃあ、説明してみなさい」

澄香の口調は有無を言わせないものだった。

「うん。昨日の事なんだけど」

そこへ、沈黙していた紗那が口を開いた。

「ねえ凜、この人だれ？名前も呼び捨てだし、私と話してる時とは話し方が随分違うけど・・・」

「紗那さん？えっと、澄香は僕の幼馴染で」

「恋人なの？私が肌を許したのに・・・凜には恋人がいるの？」

「お願いですから、そういう言い方は」

またしても、凜の言葉は遮られた。両肩には、それぞれ澄香の手と紗那の手が置かれている。

「あの・・・澄香も、紗那さんも出来れば落ち着いて話を聞いてもらえると」

「凜は大人しくしてて！」

「つまり、妖界っていう世界がもう一つあって、この人は人間じゃなくてそこに暮らす妖っていう存在だと・・・」

あれから、凜が何度も宥めた末に澄香と紗那はようやく落ち着き、今までの経緯を澄香に説明する事になった。

凜が紗那を連れ込んだ云々という部分に関しては、『よくよく考えれば、凜がそんな事するはずがない』と納得した。だが・・・

「・・・こんな話をボクに信じると？」

「僕も最初は信じられなかったけど、嘘じゃないんだよ・・・」

もう一つの世界の存在や、紗那の正体など、常識から掛け離れた部分については全く納得していない様子だった。

「別に凜が嘘を言っているとは思ってないよ」

「え？」

凜はその言葉を聞き意外そうな表情をする。自分の言葉が疑われているのだと思っていたのだ。だが、続く澄香の言葉を聞いて表情は

元に戻る。

「凜の事は信頼してる。でも、この人が凜を騙しているのかもしれない」

今度は紗那が反応する番だった。

それまで凜が説明するのを黙って見ていたのだが、疑いの視線を向けられれば黙っているわけにもいかない。

「あら、心外ね。まるで私が嘘つきみたい」

「凜には悪いけど、こんな突拍子もない事は自分自身の目で見ないと納得出来ない。ボクはそういう性格なの」

「自分自身で体験すれば、納得してくれるのかしら？」

「そうだよ」

その返事を聞き、紗那の口元が僅かに歪んだ。

「じゃあ、体験させてあげる」

そう言くと、紗那は澄香に向かって手の平を突き出した。そしてほんの一瞬、その手の平が光った気がした。

「……何？そんな手品で、ハツタリのつもり？」

「す、澄香……それ……それ……」

嘲笑つかのような口調の澄香だが、凜がその澄香を指差し驚きに満ちた顔をしている。

凜が指差す先は、澄香の頭だった。

「凜？ボクの頭がどうかし」

澄香が頭に手をやると、何かふさふさしたモノに触れた。髪ではない。そこには、ふさふさとした狐の耳があった。

「……わあああああああ！？」

家中に悲鳴が響く。澄香は自分の身に起きた現象によって大混乱に陥っていた。

「な、な、何！？何これ！？ど、どうしてボクの頭にこんなものがない？！」

「何って、体験させてあげるって言ったじゃない」

何を驚いているの？という顔で紗那は平然と言い放つ。

「は、はやく、元に戻して！」

「じゃあ、もう信じてくれた？」

「信じる！信じるから！」

「・・・『この人』じゃなくて、ちゃんと名前で呼んでくれる？」

「呼ぶ、呼ぶよ！紗那って呼ぶから！」

自分の望む言葉を引き出し、紗那は満面の笑みを浮かべていた。

「じゃ、勿体無いけど元に戻してあげる」

身を乗り出した紗那の手が触れると、問題の耳は跡形も無く消え失せていた。

「あ・・・も、戻った・・・」

異物が消えた事に安堵していた澄香だが、聞き捨てなら無い眩きを聞いてしまった。

「・・・無くなっちゃった」

「・・・随分と、残念そうだけど・・・どうしてかな？」

鋭い視線が、眩きを発した凜に突き刺さる。

「あ・・・残念なんかじゃないよ？決して、せつかくのふさふさの耳が、なんて思っていないから！」

「へー？そんな風に思ってたんだ？」

「いや、だから思っていないって！えっと、その・・・」

墓穴を掘った凜が、澄香の後ろの方を指差した。

「ボクがそんな古典的な手に引つ掛かるとでも？」

「ち、違うよ澄香！時間！早くしないと、学校が！」

指差す先には、時計があつた。時刻は8時20分。二人が通う加衣学園では、8時35分までに登校しないと遅刻扱いになる。ちなみに、このマンションから学園までは普通に歩いて20分以上かかる。振り返って時計を見た澄香は、驚き、そして凜を急かす。

「もうこんな時間！？凜、早く準備して！」

まだ身支度を済ませていなかった凜は、慌てて自分の部屋に戻る。1分程でリビングに戻るが、澄香の姿はそこには無い。

「凜もつと急いで！こんな訳の分からない事のせいで遅刻するなんて、ボクは絶対に嫌だからね！」

澄香は既に靴を履いた状態で玄関にいた。凜は慌てて向かおうとしたが、思い出したように振り返った。

「紗那さん、すいません。詳しい話は学校が終わったら」

「凜、急いで！」

「今行くよ！じゃあ紗那さん、そういう事で。行ってきます！」

「はい、行ってらっしゃい」

急かされて家を出て行く凜を、手を振って送り出す。

凜は気付いているのだろうか？留守を任せた事。『行ってきます』

と言った事。それは、紗那をこの家の住人として既に認めている行為だと。

「学校、か・・・」

あつという間に静かになった家の中に、紗那の呟きだけが残っていた。

第2話 幼馴染と狐耳（後書き）

修正ばかりでホント申し訳ありません・・・
あと1、2日くらいで続きを書きたいと思いますので、どうかお許し下さい・・・

第3話 ため息だらけの二人（前書き）

やっと続きが出来ました。

私などの作品を待っていて下さる方々には、大変お待たせしました。

第3話　ため息だらけの二人

私立加衣学園は、街の北側にある小高い丘の上に建っている。実の所、丘一帯が全て学園の敷地なのだが、何故か麓ではなく丘の上に建っている。

丘の上に行く為には当然の事ながら坂道を上らなければならないので、学園の生徒達からはかなり不評であった。

そしてその坂道のせいで、必死の走りも空しく凜と澄香は見事に遅刻していた。

「おはよう、お二人さん。珍しいな、お前らが遅刻するなんて。何かあったのか？」

朝のHRが終わり、自分の席でグツタリとしている凜と澄香　席は隣同士だ　の元へ、一人のクラスメイトがやって来た。

氷野隆也。ひのりゅうや家の方向が違う為に朝の通学こそ別だが、二人の共通の幼馴染だ。二枚目な顔立ち（自称）というのは多少大げさだが、確かにカツコイと呼ばれる部類には入る。華奢な凜とは違い、体つきはガツシリしているし身長も182cmある。

「ああ、おはよう隆也。うん、実はね・・・家にきつ　むぐつ・・・ぐつ」

「馬鹿、何を正直に言おうとしてるの。あんな事、人においそれと話せる事じゃないでしょ」

いきなり真実をぶちまけようとした凜の口を、横から伸びた澄香の手が押さえ込み小声で嗜める。

「で、でも隆也は幼馴染なんだし、隠してたってすぐに・・・」

「だからって、こんな所で言っても信じるわけないでしょ。ボクだって、あんな事が無かったら信じないよ」

「・・・何やってんだ？」

「うわあっ!？」

ひそひそと話す二人を不思議に思い声をかけた隆也だったが、それ

に対して澄香は異常なまでに驚く。

「お、驚かさないでよ隆也！」

「いや、驚かすなって言われても・・・澄香、お前こそ何でそんなに驚いてんだ？」

「あー、うん、えっと・・・そうそう、何で遅刻したかだったよね？ボクがマンションの前まで行っただけで凜がいなくて、部屋まで行ってみたら凜がまだ寝てたんだ」

「へー、凜が寝坊とはね。本当に珍しい事もあったもんだ。夜更かしで寝不足って感じじゃあ・・・ないよな？疲れるような事でもあったのか？」

あからさまな話題転換だったが、気にする事なく会話は続けられる。
「うん、大した事じゃないんだけどね・・・（大した事だし、疲れたのは今朝だけだね・・・）」

「そつか・・・でも、何かあったらすぐ言えよ。ほら、俺って意外と靈感強いだろ？はつきりじゃないんだが、お前から何か感じるような気がするんだよな」

何気ない隆也の言葉がいきなり核心を突いてきた事で、凜と澄香は再びひそひそと話し始める。

「ど、どうしよう澄香？すぐにバレそうなんだけど・・・」

「落ち着きなよ凜。平常心だよ、平常心。いくら隆也の靈感が普通の人より強いからって、黙ってれば分からないって」

澄香は先程の自分の態度を棚に上げて平常心を説く。

「（平常心、平常心、平常心・・・）・・・気のせいだと思うよ、隆也。はつきりじゃないんでしょ？」

「まあ、そうかもな。それに何かそういう類のものが取り憑いてたとしても、俺じゃどうにも出来ないし・・・どうにかするなら親父の領分だ。あ、試しに頼んでみるか？凜だったら別に親父も金なんて取らないだろうし」

そう。何を隠そう、隆也の父親は神職として働いている。かなり広い境内を有する、加衣市唯一の神社である天塚神社。その神主な

のだ。

御被いに関してはそれなりに有名な人で、国のお偉方もわざわざ訪れると言われる程だ。

「あはは、いいよ別に。おじさんも他に仕事あるでしょ？ただちょっと疲れただけだから、大丈夫だって」

凜は何とか笑顔を作って話そうと試みるが、内心では気が気でない。話せば話すほど、まずい方向に向かっていく。今まで御被いというのは気持ちの問題ではないかと思っていた凜だが、紗那の存在を知った今ではそうもいかない。

そこへ、凜にとって救世主となる1時限目の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「っと、それじゃあまた後でな」

「うん、また後で」

チャイムが鳴った事で隆也は自分の席へと戻っていく。それによって、凜はようやく落ち着く。

（ふう・・・助かった）

それは1時限目の終わりと共に突然やってきた。
バンッ！

教室のドアが、壊れるのではないかと思うくらいの勢いで開かれた。いや、実際に衝撃で上下の溝から外れている。

「澄香様！」

大音量の声が教室中に響き渡る。

声の主は制服を着た女の子だった。学年毎に色分けされているリボンを見れば、彼女が3年生である事が分かる。だが、それが無ければ彼女を最上級生だと判断する者は誰もいないだろう。

身長は140cm弱。顔立ちも非常に幼い、童顔というやつだ。髪型はツインテールで、おまけに可愛い髪留めが使われている。

もし学校以外の場所で私服を着ている彼女を見たら、少なくとも高校生だとは思えないに違いない。

「はぁ………やっぱり来た……」

名指しされた澄香は、深いため息をつく。その間に、彼女は素早く澄香の席へとやって来ていた。

「澄香様、遅刻されたと聞きましたが本当ですか？」

ボリウムが大分下げられた声で、澄香に尋ねてくる。

「……いつたいてどこでそんな話を聞いてくるんです？」

「不肖この鈴藤真衣すずふじ まい、お慕いする澄香様に何かあったらすぐ駆けつけられる様、常に気を配っておりますわ」

両手を胸と腰に当て堂々とした態度だが、その内容はストーカー行為とは思えない

「そうじゃなくて、それをどこから」

「詳しい事は、乙女の秘密です」

「………そうですか」

澄香は最早諦めきった表情となっているが、それもそのはず。彼女のこのような行動は今に始まった事ではない。4月の入学直後から5月末の現在までに、幾度も行われてきた事だ。

この鈴藤真衣と名乗った少女の正体。実は良いとこのお嬢様である澄香の付き人、というわけではない。むしろその逆。

鈴藤家は元華族という由緒ある家柄で、幾つもの会社を経営している国内屈指の資産家としても有名だ。つまり、新人生である澄香を様付けで呼ぶこの真衣こそ、真正正銘のお嬢様なのだ。

「それよりも澄香様。遅刻されたというのは本当なのですか？」

「は、はい。本当ですけど……」

「そんな、一体何故ですか？今朝、澄香様はいつも通りの時間に自宅を出発されたはずなのに……」

「どうして先輩がそんな事知ってるんですか！？」

「先輩だなんて他人行儀ではなく、名前で呼んで下さらないのですか？」

そう言う真衣は、目をウルウルさせながら上目遣いをしている。
幼く見える容姿と合わさり、非常に破壊力がある。

「う……それを言ったらボクだって様付けは止めて欲しいんですが……ってそうじゃなくて！どうしてそんな事を知っているのかという事を」

「乙女の秘密です」

「……もういいです」

「そうですか。ところで、遅刻されたのは何故なのでしょう？」
上目遣いこそ止めてはいるが、理由を聞くまで引かないというオーラがにじみ出ている。

「それは、えつと……」

澄香は一旦言いよどむ。

そして隣の席に座る凜の方に、ごめん、という風にアイコンタクトを送る。それを受けた凜は、長年の幼馴染の勘というやつで意味を悟り、苦笑しながらも頷く。

「その、凜が今朝はちよつと疲れてたみたいで寝坊しちゃって。それで一緒に通学してるボクも遅刻に……」

「あら、そうだったのですか」

理由を聞いた真衣は、さりげなく凜に一步近付く。

「男の分際で、澄香様に迷惑をかけるなんて何様ですか？寝坊したのなら、澄香様が来る前にそうと知らせて一緒に通学するのを断りなさい。もちろん、澄香様を傷付けないような断り方で、です。これに懲りたら金輪際、澄香様の足を引つ張らぬよう努力しなさい。

もしそれが出来ないなら、あなたを消して私が澄香様と通学します。分かりましたかこの野郎、さん」

笑顔を浮かべたまま、耳元でそう呟く。口調こそ一応丁寧だが、その言葉は理不尽さとプレッシャーに満ちている。

とは言え、凜にとってはこれが鈴藤真衣という人物だ。好意を寄せた澄香やその他の女子には隠しているが、一度矛先となった者（主に男）に対してはこの丁寧なようで丁寧でない毒舌が発揮される。

凜もこれまでに何度もその矛先となってきた経験がある。

だが彼女の毒舌を暴露しようとは思わない。勇敢にも暴露しようとした者が過去に何人かいたらしいが、何故か全員が転校していったという。

いくら鈴藤家が国内屈指の資産家であるとは言っても、さすがに『消す』とかは冗談だろうと、凜はそう信じたかった。

「・・・？先輩、凜と何を話してるんです？」

「はい。彼に、これからは寝坊しないように気をつけて下さいと」

真衣は驚くべき変わり身の速さで澄香の疑問に答える。

確かに大まかな内容は間違っていない。

「そうですね、山内君？」

再び、凜の方に顔を向ける。その笑顔には強力なプレッシャーが込められている。それを見れば、凜の答えは決まっていた。

「う、うん。注意されちゃったよ、ははは・・・」

「それでは澄香様。そろそろ次の授業が始まりますし、私はこれで失礼致します。澄香様自身に何かあったわけではなく、安心してしまいたわ」

そうやって別れの挨拶を告げると、やって来た時とは違い、お嬢様然とした優雅な足取りで教室から去っていった。

「はあ・・・やっぱりの先輩は苦手だなあ・・・」

後には、澄香のため息だけが残される。

ちなみに、教室のドアは無残にも機能を喪失したままであった。

放課後。凜と澄香の二人は、共に疲れた表情で帰り道を歩いていた。学園での午前中の出来事と、放課後における隆也と真衣への対応の為であった。

隆也は靈感によって感じ取る何かを盛んに気にしていた。凜にしてみれば、実際に心当たりがあるのだから隆也を家に招くわけにもい

かず、別に問題は無いと、何とか隆也を納得させた。

真衣は澄香と共に下校しようと試みていた。最もこちらは今日に限った事ではなく、やんわりと断る澄香を前にしていつもの様に諦めていた。

「・・・疲れた」

「うん、ボクも・・・」

「でも、まだ紗那さんっていう最大の問題が全然片付いてないんだよね・・・」

「・・・そうだね」

「「はあ~~~~~」」

二人のため息は、今日もつとめ深いものだった。

この時はまだ、知る由もなかったのだ。今までの事など霞むくらいの出来事が待ち受けている事を。

第3話 ため息だらけの二人（後書き）

夏バテからも回復しました。これからは更新速度を上げていきたい
と思いますので、どうかご声援をよろしくお願いします。

第4話 平和な学校生活の崩壊

お天気雨に降られて森に入ったのがいけなかったのだろうか？

その森で怪我をしている狐を見つけたのがいけなかったのだろうか？
手当てする為にその狐を家に連れ帰ったのがいけなかったのだろうか？

そんな風に考えが混乱している自分でも確かだと分かるのは、紗那さんとの出会いによって今までの日常や常識が崩壊したという事実。それを再認識させられた。

目の前で繰り広げられている信じられない現実。一体どうしてこんな事になったのか？恐らく、紗那さんと出会った朝の時点で決まっていた未来だったのだろう。

ため息を吐きながらも共に帰宅した凜と澄香は、今後について紗那と話していた。

凜も自分の事を好きになってくれるまでは決してやましい事はしないと紗那が宣言した為、最大の問題点だった部分に関しては取りあえず先送りにされていた。

だが、予想通りと言うべきか、紗那は凜の家で共に住む事を頑なに主張し続けていた。

「あなたは一体いつになったら諦めるの？」

「だから私は諦めないって言うてるでしょ。凜の事が大好きだし、森の埒とは比べ物にならないくらい居心地が良いもの。それと、名前前で呼ばないとまた耳生やすよ？」

「う……」

「今度は、1週間くらいどうやっても消せないようにしようかな」
「分かったよ！……し、紗那」

「はい、よろしい」

澄香を翻弄する紗那の姿は、どこからどう見ても楽しんでいるようにしか見えない。今朝の話を信じるなら、紗那は少なくとも300年以上生きている事になる。その年季の違いを考えれば、当然の結果なのかもしれない。

「・・・大体ね、そこらの話に出てくる妖怪なんて人間に悪さをするようなのばかり。あな・・・紗那がそうじゃないって保証がどこにあるの？」

「えつとね、誤解の無いように言っておくけど、そもそも妖と人間は生まれ落ちた世界が違うの。やっぱり妖界むじうの方が居心地良いし、人間と関わる必要だつてない。確かに人間に危害を加えるような妖はいるわよ？でも、わざわざ妖界を抜け出して、拳句には人間相手に襲い掛かるなんて、余程ひねくれた奴くらいのものよ」

「余程ひねくれた奴、に当てはまつてるとボクは思うけどね」

「まあ、自分がひねくれないとは言わないけどね。少なくとも、凜に危害を加える事だけは絶対に無いわ」

「だから、どこにそんな保証があるつての？」

互いに一步も譲らない二人だったが、やりとりに置き去りにされていた凜が入ってくる。

「あのさ、澄香。紗那さんの言う事は信用出来ると思うんだ」

「凜！？どうして、肩なんて持つの？」

「だって、紗那さんが何かするつもりなら、いくらでも機会はあったよ。今朝とか、それこそ今この場でだって」

凜もやはり男だから、一目惚れしたと言われて嬉しい気持ちはあった。そして何より根が優しい凜は、森よりも居心地が良いという紗那の同居を既に認めつつあった。自分を庇うそんな凜の言葉に、すかさず紗那が追従する。

「そうそう。疑われてるんだから、やるなら今ここでやつちゃってるわよ」

「そんなの油断させる為かもしれないでしょ」

「でも、やっぱり信用出来ると思うんだ。何かするつもりなら機会はあったとかそういう事じゃなくて、そんな感じがするというか・・うゝん、何て言えばいいのかな・・」

引き下がるつもりのなかった澄香だが、悩み始める凜を見て引き下がる事にした。少なくとも信用云々については。

「はあ・・分かった。もういいよ。凜がそこまで言うんだったら、それに関してはボクはもう何も言わない」

「ありがとう澄香」

「でも！」

澄香は身を乗り出し、お礼を言う凜の眼前に指を突き出す。

「もう一つ、大事な問題が残ってるよ」

「え？」

「紗那、あなただって食事ってするんでしょ？」

凜に向かって指を突き出した姿勢のまま、紗那の方に顔を向けて尋ねる。

「そうね。基本的には、人間と同じものを食べるわ」

「だったら、お金はどうするの？単純に計算しても食事の量が倍になるんだよ？」

「何か、急に現実的な話になったね・・」

「でも、大事な事だよ」

妖などという存在を相手に食費の話をするなんて、マトモではない。澄香自身もそれは自覚していた。だが、紗那が凜の家に住み着くというのを阻止する為には、もうお金の問題を指摘するくらいしか思いつかなかったのだ。

「なんだ、そんな事気にしてたの？」

当事者であるはずの紗那が、心底意外そうな声を出す。

「あ、あのね！妖の社会がどうなってるかは知らないけど、人間の社会ではお金ってというのは」

思わず声を荒げる澄香が言い終わる前に、紗那がそれを止めた。

「うん、お金が必要だって事は分かってる。だから、私が働いてお

金稼げばいいんでしょう？凜が学校に行ってる間は家で待ってても暇だし、言われなくても働くつもりだったわ」

そう言われれば、澄香も反論出来ない。凜が紗那を信用し、お金の問題まで片付くとなれば、これ以上は反論する材料が見つからなかった。

一夜明けた朝、凜の家は以前の静けさを取り戻していた。

昨日の話し合いの後、澄香は凜を心配しながらも自分の家に帰り、また紗那も森にある塀を整理しに行っていた。なので、昨晚は凜にとっては一人暮らし最後の夜だったのだ。

凜が起きた時にも、紗那の姿は無かった。よく見てみるとリビングのテーブルの上に『仕事に行ってきます』と書かれたメモがあったので、凜が寝ている間に一度戻ってきたのだろう。

朝食を食べ終わった後、凜はふと考えていた。

（そう言えば・・・仕事って、いったいどこで働いてるんだろ？元々、どこかで働いてたのかな？）

だが、その考えはすぐに中断させられる。

ピンポン！

「あ、澄香かな」

凜が玄関に向かうと、その目で玄関が開く。

「凜、まだ生きてる！？」

そこにいたのは、やはり合鍵を手にした澄香だった。

「おはよう澄香。そんな大げさな・・・」

「大げさじゃない。ボクは心配してたんだよ？・・・あいつは？」

澄香は家の中を伺い見るような仕草をしながら聞いてくる。

「紗那さんならいないよ。仕事に行ってきますってメモがあったから、一度戻ってきたんだと思うけど」

「ふん。朝からいなくて事は、本当に仕事行つたのかな・・・」
「たぶんね」

澄香はまだ納得がいかない様子だったが、それ以上追求する事はなかった。

「凜、もう準備終わってるの？だったら早く学校行こ。ボクはもう、昨日みたいに遅刻するのは嫌だからね」

「ああ、うん。鞆取ってくるからちょっと待ってて」

そう言つて凜は、自分の部屋に向かう。

10数秒ほどで玄関まで戻つて来て、そのまま澄香と共にマンションを出て学園へと歩く。

しかし、二人は昨日もつと詳しく聞くべきだったのだ。紗那がここで働くのかという事を。

「おはよう、お二人さん。今日はいつも通りだな」

教室に入った凜と澄香に真つ先に声をかけてきたのはやはり隆也だった。

「隆也おはよう」

「おはよ」

挨拶を交わした後、凜の席がある方へ向かう。

「そうそう、ビッグニュースがあるぞ」

「ビッグニュース？」

オウム返しに尋ねる凜に、隆也は力強く頷いた。

「うちのクラスの副担任として、新しい先生が来るらしいぜ」

「確かに副担任が居ないままだったけど・・・そんな話、ボク聞いた覚えはないよ？」

「なんでも、赴任してくるのは前から決まってたんだが、学園長が伝達するのを忘れてたとかでな。それで昨日の夕方になってようやく話が伝わったそうだ」

隆也は澄香の疑問にすらすらと答えていく。

「隆也がそんなに詳しいって事は、女の先生なの？」

「ふふふ、その通りだ。俺が直接見たわけじゃないが、後姿を見たやつによれば、綺麗な金髪でモデルみたいな体形だったらしい」

後姿だけの情報だと言うのに、隆也は嬉々として語る。それを凜は苦笑しながら聞いている。隆也の女性好きは今に始まった事ではない。黙っていればカッコイイのに、その軽いノリのせいであまりモテた事はないのだ。

「ねえ、凜。金髪でモデルみたいな体形って・・・気にならない？」
隆也に気付かれぬように、澄香が小声で話しかける。

「紗那さんの事？でも、前から決まってたって言うし違うんじゃないかな？」

「うん・・・そう、だよ。そんなわけないよね」

だが、そんな二人の考えは次の瞬間打ち砕かれる事となった。

ガラッという音がした方を見ると、クラス担任がやって来ていた。

「ちよつと早いがみんな席につけ。もう知っている奴もいるかもしれないが、うちのクラスに副担任が来る。学園長が話を伝えるのを忘れていて、こんな急な事になった。それでは、狐塚先生」

促されて教室に入ってきたのは女性。確かに隆也の言う通りだった。透き通るような金髪。モデルのようにすらっとした体形。おまけに顔立ちも、日本的ではあるが美人のそれだ。

「皆さん初めまして。このクラスの副担任になる狐塚紗那と言います。個人的な事情で、このような中途半端な時期の赴任となりました。その旨は学園長も分かっておられたのですが、他の先生方に伝えるのを忘れていたようで。突然の事で皆さんも驚いているでしょうが、これからよろしくお願いします。ちなみに、担当する教科は日本史です。日本史を選択している人とは、授業でも会うと思います」

その女性、狐塚先生の美しさに男子は熱狂し、女子も見惚れている。さらに、日本史を選択している男子はガッツポーズまでしていた。

そんな教室の中で、呆然としている者が二人いた。凜と澄香だ。それもそのはず。

狐塚紗那として紹介された女性は、間違いなく二人の知る紗那そのものだったのだから。

第5話 赴任初日

「よく来てくれましたね、二人とも」

「……………で、どういう事なの？」

昼休みの校舎の屋上。凜と澄香の二人は『昼休み 屋上 澄香も』と何故か断片的にしてあるメッセージの紙切れによって、副担任となつた狐塚紗那から密かに呼び出されていた。

ちなみにこの学園の屋上は普段は開放されておらず、昼休みと言えども他に人影はない。

「昼休みもそんなに長いわけではありませんので、用件を単刀直入に言いますと、先生の正体は二人の知つてゐる紗那なんですよ」

「そんな事言われなくても分かつてるよ！というかその丁寧口調！はつきり言つて気持ち悪いんだけど、いつまで続けるの！？」

「気持ち悪いって言われるとさすがに傷付くなあ。いや、ね？久しぶりにこんな言葉遣いしたから切り替えが上手く出来なくて、私だつて困つてゐるのよ？」

澄香との会話をきっかけに、今まで見せていた狐塚紗那としての顔が引つ込み、二人の知る元の紗那の顔になる。

「ええと、紗那さん。それで、これはどういう事なんですか？」

「だから、これからここで教師として働くの。ちゃんと仕事はするよ？」

紗那は凜の問いに答えるが、それが望まれている答えと違ふのは明らかだ。

「ボク達は、どうしてここで教師をしているのかっていう、その詳細を聞いているの。誤魔化すのは無しだよ」

「はいはい、分かつてますよ。そんなにぶんけんしてると、幸せが逃げてくよ？」

「んなつ！？だ、誰のせいだと思つて」

「はい、それではご希望の通りに詳しく話しましょう。えっと、ま

ずは・・・」

怒りのやり場を奪われた澄香は、仕方なくその気持ちを抑える。このあたりは、やはり紗那の方が一枚も二枚も上手だ。

「まあ、ここで働く事に決めたの」

「だから、それはもういいって!」

「話はまだ途中。始めたばかりで止めないの」

さすがにこれ以上からかうのは良くないと思ったのか、紗那はその先を続ける。

「結論から言えば、ここの学園長にお願せんのういしてみたのよ」

「・・・紗那さん、凄く不吉な予感がするのは気のせいでしょうか?」

「意識を操作する、分かりやすく言うなら催眠術の強化版みたいな術を使って、新しく教師が赴任してくるって思い込ませただけよ?」

「思い込ませたって・・・必要な書類とかはどうしたんですか?」

「ああ、それはもっと簡単。触感のある幻覚っていうのかな。適当な紙を、しっかりとした書類に見えるようにしたの。半永久的にね」話している内容はとんでもない事なのだが、それを話す紗那自身はあっけらかんとしている。妖である紗那にとっては術というのは身近なものだが、凜達にとってはそうではない。

「紗那さん・・・」

「なに、凜?」

「紗那さんがした事は悪い事です。学園長を騙したり、書類をでっち上げたり、人間の世界では悪い事です」

「え・・・怒ってるの、凜?そりゃあ、凜と一緒にいたいからここで働く事にしたのは否定しないよ。で、でも、仕事はちゃんとするよ?私だって、昨日のお昼のうちに色々調べて、人手が足りてない教科を選んだの。長生きしてるから、歴史だったら教えるのにも丁度良いし・・・だから、えっと・・・」

凜の気配を察した紗那は、今まで見せた事がないくらいに動揺し始

める。

「・・・・・・・・」

「その・・・あの・・・・・・・・ごめんなさい。もう、凜に何も話さないでこんな術使わないようにするから。だから・・・ごめんなさい」

尚も無言でいる凜を見て、紗那はより一層動揺し、しまいには涙声になっていた。今さっきまで澄香をからかっていたのと同人物だとは信じられない程だ。

「・・・・・・・・」

「ごめんなさい・・・嫌いにならないで・・・・・・・・」

実際の所、凜が無言でいたのは怒っていたからではない。いや、最初は怒っていた、というかお説教をするような感じに近いものがあった。

だが、動揺し始める紗那の様子を見て、凜はそれ以上に動揺していた。

凜にとっては、その真面目な性格から発せられた何気ない言葉だった。同時に、紗那と自分は今まで生きてきた世界が違うのだという事も理解しているつもりだった。言ってはみたものの、紗那にはあまり意味がないだろうとも思っていた。

凜の家に住むと宣言したり、凜や澄香をからかったりしていたあの紗那が、自分の言葉でこんなにも動揺するというのは完全に予想外の事だった。

普段ならこういう時に凜を助けるのは澄香だったが、さすがの澄香も目の前の光景に言葉を失っていた。

「・・・・・・・・もう、術も解除するから。ここで働くのやめるからだから、嫌いにならないで・・・」

紗那がそこまで言った時、ようやく凜は正気を取り戻す。

「紗那さん」

名前を呼ばれた紗那がビクツと体を震わした。

「その・・・僕と紗那さんでは人間と妖っている差があるし、生き

てきた世界も違うという事は分かっているつもりです。だから、これから気をつけてくれれば、怒ったりはしません」

「・・・怒ってない？」

「はい。黙っていたのは、ちょっとビックリしたというか・・・
とにかく、怒っているわけじゃありません」

「・・・本当？」

「本当です」

凜がそれを答えると、今まで不安そうにしていた紗那の顔が段々と元に戻っていく。

「でも・・・」

「で、でも？」

凜がそう言った途端、紗那が再び不安そうな顔になる。だが、続く言葉を聞いて満面の笑みを浮かべた。

「先生として働くのをやめたら怒ります。ここまでやったんですから、途中で放り出すのはよくありません」

「え・・・あ、うん！」

凜と紗那が互いに笑いかけたりする屋上で、一人だけ話から取り残され不満げな澄香がそんな二人を見つめていた。

昼休みが終わり、午後の初めの授業。ここで早速、紗那が教鞭を振るう機会がやって来ていた。

「はい、皆さん初めまして。今日から日本史の選択授業の担当になった狐塚紗那です。これからよろしくね」

紗那がそう挨拶すると、教室内のほぼ全ての男子から歓声上がる。凜はそんな中で唯一、歓声を上げていない男子だった。

「ねえ、凜。しゃ・・・狐塚先生、もう素の喋り方になってるけど本当に大丈夫なのかな？」

そして、普段のクラスと同様にここでも澄香と凜の席は隣同士だった。

た。例によつてひそひそ話の最中なのだが、万が一他の誰かに聞かれた時の為に先生と呼んでいるようだった。最も本当に誰かに聞かれれば、内容が内容なだけに呼び方など関係無いのだが。

「なんだかんだ言つて紗那さんのこと心配してるの、澄香？」

「ちつ、違つよ。ただ・・・連鎖的に凜やボクに被害が出るのを心配してるんであつて・・・」

「そつか」

「・・・その素つ気無い言い方、信じてないでしょ？」

そんな会話をしている内に、教室内はどんどんヒートアップしていった。

「みんな静かに！・・・はあ、分かりました。5分間だけ、質問タイムを設けます。5分経つたら、必ず授業を始めるからね」
妥協案が紗那から提案されると、無秩序だった教室がいくらか落ち着く。

だがそれも束の間。先程よりはマシだが、いくつもの質問が教室を飛び交っている。

「先生つて、恋人とかいるんですか？」

ついに、新任教師への定番とも言える質問が出された。紗那は答えを考えるような素振りを見せ、それをクラス中が固唾を呑んで注視している。

「そうね・・・恋人、はいないかな。でも、片想いしてる人ならいるわよ」

紗那の返答に、男子は明らかにヒートダウンし、逆に女子はきやあきやあ騒ぎ始める。

その一瞬の隙を突いて、微笑む紗那の視線がちらつと凜の方に向けられていた。凜は何となく赤くなるが、その視線は当然の事ながら隣の澄香も気付くものだった。

「良かったね凜。男子があんなに騒ぐ美人の片想いの相手で」

「なつ・・・す、澄香。誰かに聞かれたら・・・」

焦る凜を見て、澄香はさっきのお返しだと言わんばかりの表情にな

る。

「男子達に目の敵にされるかもね？特に前の方で騒いでる、あの隆也とかに」

そう言つて示した先には、紗那が質問に答える度に一喜一憂する隆也の姿があつた。

「澄香・・・」

「はいはい、分かつてるよ。ボクはばらしたりしないって」

澄香は情けない声を出す凜を適当にあしらつていく。

そうこうしている内に、5分間の質問タイムが終了する。

「それじゃあ5分経過したので、質問タイムはこれで終わりです。授業を始めます」

教室内からは延長を求める声上がるが、紗那はそれに応じない。

「駄目です。お給料を貰つてる分はちゃんと仕事をしないと、私が怒られるんですからね」

嫌味を感じさせない口調でそう言つと、再び凜の方に視線を向ける。

「あ・・・紗那さん」

なんだか少し嬉しそうにしている凜を横目で見ながら、澄香は凜にも聞こえない程の小さな声で呟いた。

「・・・何か、納得いかないなあ」

第5話 赴任初日（後書き）

ほんつとくに申し訳ありません。

九月の初めから忙しくて、続きを書く時間が取れないまま一ヶ月半以上も放置してしまいました。

本来ならその旨だけでもお知らせしておくべきだったのですが、忙しさのあまり忘れていました。これを書いている段階で、ようやくそれに気付きました・・・

私如きが書く小説の更新を待っていて下さった皆様には、心からお詫び申し上げます。

忙しさも先日ようやく収まってきたので、明日明後日くらいには続きを投稿したいと思います。

第6話 歓迎会

学校の授業が終わり、自分の家への帰り道を歩きながら澄香は考え事をしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・やつぱり不安」

澄香に不安を抱かせる原因は、突然現れた紗那の存在。

凜は信用しているようだが、澄香からすればとてもではないが信用出来ない。紗那と出会ってからというもの、ろくな目に遭っていないのだ。

「大体、何で凜は信用してるの？ボクと同じ目に遭ってるはずなのに・・・・・・・・紛らわしい言い方のせいで凜に詰め寄る羽目になっ
たし、いきなり頭に狐耳なんて生やされてそれで脅されたり・・・
今日に至っては、訳の分からない術とやらでボク達の学園に潜り込んでくるし！あんなの、どうやって信用しろっての！？」

澄香は自分で喋っている内に怒りがこみ上げてきたのか、そこが道端である事も忘れて大声を張り上げる。

「でもなあ・・・・・・・・凜ってあれで結構譲らない所あるし、ボク
が何か言ってもあんまり効果無いだろうな・・・」

そうこうしている間に、澄香は既に自宅前に到着していた。

「はあく。なんか良い方法ないかなあ・・・・・・・・」

考え事で上の空のまま、鍵を開けて家の中へ入る。その状態で自分の部屋へと行こうとした所で、澄香の足を止める声が聞こえた。

「ただいま、は？」

「あ、お母さん。・・・ただいま」

居間の方からやって来たのは澄香の母の佳織だ。かおり 学生結婚して二十歳の時に澄香を生んだので、高校生の娘がいるとは思えないくらい若々しい。また、娘と同じく女性としては長身の部類に入る。

「はい、お帰りなさい澄香・・・・・・・・どうかしたの？」

「え？何が？」

「悩み事があるって顔してるわよ？」

「っ!？」

澄香の反応を見て、面白そうに笑う。

「あのね、私を誰だと思ってるの？あなたの母親よ？娘が悩んでるかどうかわくらい分かるわよ」

「お母さん・・・」

「で、一体何を悩んでるの？」

「えっと・・・実はね」

居間にやってきた澄香は母に事情を話していた。

とは言え、妖などという存在について話せるはずもなく、肝心な部分は隠している。

その内容を簡単に纏めると、凜に一目惚れして付きまとっている人がいるというものだった。紗那の正体を隠すとなると、この説明が精一杯だろう。

「澄香・・・あなた何をやっているの？凜ちゃんが心配なんですよ？」

「う、うん。そうだけど・・・」

「凜ちゃんとその人の仲を認めたくないんでしょう？」

「え？あ・・・うん。そうなるかな」

「じゃあ、善は急げ！よ。ちよつと待つてなさい」

そう言っていると、澄香をその場に残して自分は居間から出て行ってしまふ。澄香が大人しく待つていると、家のあちこちからガサゴソと音が聞こえてくる。

「お待たせ澄香。はい、これ！」

しばらくの後、居間に戻ってきた母の手には大きなボストンバッグが握られていた。

「何これ？」

「洋服とか下着、それに日用品よ」

「そんなの、どうするの？」

澄香は頭の上に大きな？マークが浮いていそうな表情で聞き返す。

「どうするって、だって必要でしょう？これから凜ちゃんの家で生活するには」

「・・・・・・は？」

「恋に争いは付き物よ！あなたが凜ちゃんの家で生活して、凜ちゃんとその人の仲を邪魔するの。そして凜ちゃんをゲットしてきなさい。あ、私が見繕った勝負下着も入れておいたから」

「なっ？！しよ、しよしよ、勝負下着！？そんなものいらないってば！・・・・ってそうじゃなくて！」

母の言動に顔を真っ赤にしていた澄香だが、自分と母の会話が噛み合っていない事を修正しようとする。

「いい？凜ちゃんをお嬢さんとして連れてくるか、凜ちゃんに完全に振られるかするまで、この家の敷居は跨がせないからね！」

「あのね、お母さん！だから、そういうんじゃないかって」

だが、澄香の文句を他所に母はどんな話を進めていく。

「早速これから行つてらっしゃい。大丈夫、凜ちゃんのご両親には私から連絡しておくから」

既に日も傾いた午後6時頃。山内家のリビングには、凜、澄香、紗那の三人が揃っている。

「・・・・で、そんな母親の存在を私に信じると？」

澄香が大きな荷物を抱えて来訪したのは30分程前。紗那もその直後に帰宅した。

そして澄香は、自分の家を追い出された理由を二人に説明していた。「僕も昔は驚いたんですけど・・・・・・本当です、紗那さん。おばさんはそういう人なんです」

「そっか。凜が言うなら間違いないね」

澄香の話す母親像をまったく信じていなかった紗那は、凜の言葉にあっさりと態度を変える。

「・・・・・・・・・・はあ」

普段ならその変わり身の速さにツツコミを入れていそうな澄香だが、今はすっかり疲れ果てた表情をしている。

「澄香、大丈夫？」

「・・・・大丈夫じゃない」

「だよね・・・・取りあえず、おばさんの誤解が解けるまで居てくれて、うちは大丈夫だから」

凜は何とか慰めようとしていたが、澄香にはそんな事を気にしている余裕も無い。

「（どうするかな・・・・凜のおじさんとおばさんも結構いい加減な人達だから、このままずっと居候する事にもなりかねないし）・・・・」

「それにしても、何でおばさんはよりにもよってそんな条件を出したんだろ。澄香は心当たりとかない？」

話を自分に振られて、澄香は一気に現実に取り戻される。

「えっ！？い、いや・・・・理由はボクにも・・・・」

「そっか」

「うん。迷惑かけてごめん・・・・（一緒に登校してる事とか、昔から凜について色々相談してたのが原因かなあ・・・・一緒に登校してるのは仲が良い幼馴染で方向も同じだからだし、相談だって凜の事が心配だからだったんだけどな）」

この状況に気が気でない澄香だったが、次の紗那の一言が幸か不幸か、それを忘れさせる事になった。

「まあ、誤解を解くまでもなく解決する方法はあるわね」

「紗那さん、それどんな方法ですか？」

期待を渗ませる凜に、紗那はその顔に笑みを浮かべて答える。

「凜を私に惚れさせれば良いだけの話よ。元からそのつもりだったんだし、そうすれば凜に振られたって事で帰れるでしょ？澄香じゃ私の恋のライバルとしては役不足よ」

思考に耽っていた澄香は、その言葉にピクツと反応する。

「……へえー？凜と昨日今日出会ったばかりの人が、生まれてから16年間ずっと凜の幼馴染だったボクに勝つ？ライバルにもならないってのはこっちの台詞だよ」

澄香はそれまでの疲れ果てた表情を一転させ、紗那を挑発する言葉を吐く。

「す、澄香？勝つって、一体何に」

良くない雰囲気を感じ取ってか、凜は何とか宥めようとする。が、それはあっけなく失敗に終わった。

「凜は黙ってて。これは女としてのプライドの問題なの」

睨まれた凜がたじろいだ瞬間、紗那が澄香を挑発し返す。

「あら、澄香に色恋沙汰は早いんじゃない？まだ『女』というよりも『女の子』でしょうし」

「そっちこそ、何百年も生きてたら女心なんて錆び付いてるんじゃない？」

「ふふふふ」

「あはははは」

凜が止める間もなく、二人の言い争いはどんどん激化していく。その光景を見た凜は止める事を諦め、その場をこっそりと離れていった。

「晩御飯でも作ろう……………」

トントントントント

山内家のキッチンに包丁がテンポよく動く音が響く。

「ふう、こんなもんかな」

包丁を持ちキッチンに立っているのは凜だ。その目の前には、切り揃えられた野菜や解凍されたお肉が並んでいる。紗那の歓迎の意味も兼ねて、夕食は焼肉と決められていた。

準備を終えた凜は、二人の争いが収まっている事を願いながらリビ

ングへと向かう。しかし、リビングのドアに近付いたところでその願いが叶わない事が分かる。

「お子様な澄香には分からないかもしれないけど、恋とか愛ってのは時間じゃないのよ？」

「もっともらしい正論言ってるけど、ようはボクと凜が過ごしてきた時間の長さには敵わないって事だよな？」

「・・・誰がそんな事言ったかしら？」

「あれ、違ったの？」

睨み合う二人の激しい舌戦が、リビングではまだ続いていた。

「えっと、もう晩御飯にしたいんだけど・・・二人ともそろそろ、終わりにしてくれないかな？」

その様子を見た凜は恐る恐るといった感じで話し掛ける。

凜などお構いなしにそのまま続くかと思われたが、紗那は晩御飯というキーワードに釣られる。

「凜の手料理！？食べる食べる！」

「今日は焼肉ですから、手料理って言う程のものじゃ・・・」

「大丈夫。凜の手がちょっとでも加わってれば、それはもう凜の手料理だから」

それまで澄香と睨み合い舌戦を繰り返していたのが嘘のように、笑みを浮かべて凜を歓迎する。

「ちよっと、話はまだ」

「そう言えば、お肉食べるのって結構久しぶりかな。楽しみ」

一方、相手をしていた澄香はまだ収まっていけない様子だったが、凜や紗那の表情を見て言葉を途中で引っ込める。

「・・・まあ、いいか。凜、ホットプレートは？」

「さっきからコンセントに繋いであるから、もうそろそろ温まったと思うけど」

「じゃあボクは材料運ぶから、凜はホットプレートこっちに運んで」「うん、分かった」

役割分担を決めた二人がキッチンの方に向かおうとした所で、あつ

という間に蚊帳の外に置いていかれた紗那が口を開く。

「・・・私も何か手伝う事ある？」

「紗那さん、今日は」

「今日の夕食は、一応歓迎会も兼ねてるの。ボクは歓迎会なんてやる必要ないって言ったんだけど、凧がどうしてもって言うからね。主賓は大人しく待ってる」

澄香は凧の言を遮り、ややぶっきらぼうに内容を引き継ぐ。

「そういう事なので、紗那さんは待っててもらえますか？」

「・・・うん、待ってるね」

少し驚いた様な顔をしていた紗那だが、すぐにそれは笑顔に変わった。

大人しく席に座る紗那の眼前で、凧と澄香によってホットプレートや食材、それに取り皿や各種調味料、飲み物等がテーブルに並べられていく。

「大体、こんなもんかな？」

「そうだね。運ぶの手伝ってくれてありがと、澄香」

二人で運んだ為、ものの数分で夕食の準備は整った。

準備が整い、凧が改めて紗那の方に向き直る。

「それじゃあ・・・紗那さん。まだ色々分からない事もありますけど、これからよろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくね。大好きだよ、凧」

紗那のその台詞に赤面する凧に、澄香はホットプレートに食材を乗せていく。

「もう焼き始めたよ。凧も赤くなってるので、お箸を持つ」

そこからがまた、波乱に満ちた夕食となった。

過剰なまでに凧に接触しようとする紗那に澄香が怒ったり、同じ肉を取るうとした紗那と澄香が一触即発しかけたり・・・。

『凧の手料理』と喜んでいた紗那が最も多く食べ、既にホットプレートの上には何も無い。

「ん、よく食べた」

が、その言葉とは裏腹に紗那はまだ食べ足りぬという様子だった。何故なら、その視線は凜や澄香の取り皿に残っている分に注がれているのだから。

「ええと・・・紗那さん、これ食べますか？」

見かねた凜がそう申し出る。

「いいの・・・？」

おずおずと聞く紗那に答えようとした凜に、澄香が横槍を入れる。

「駄目」

「澄香？」

「凜はさつきも分けてたでしょ。自分で食べないと、成長しないよ？」

凜が気にしている華奢な体つきに言及し、紗那に分けないように阻止しようとする。

「でも、今日は紗那さんの歓迎会だし・・・」

「そうだね」

「だから・・・え？」

それとこれとは別、とでも言われると思っていた凜だが、あっさりと肯定されて呆氣に取られる。

「だから、まだ食べたいんだったらボクの取り皿に残ってる分からにすること。不本意だけど、一応ボクも歓迎する側だしね」

澄香が今度は紗那の方を見ながら、そう告げた。

どうにも隠しきれていないその意図を悟った紗那は微笑を浮かべる。

「澄香って意外と優しいね」

「意外とつてのは余計！食べないならボクが食べるし」

「うん、余計だった。ありがたく頂戴します」

そう言うや否や、紗那は取り皿へと箸を伸ばす。

澄香は黙ってその光景を見ていたが、紗那がいよいよ口の中へと肉を運ばうとした時に凜が声を上げる。

「あ！ちよつと待」

制止しようとした凜の声は間に合わず、箸の先端は口の中に消える。

「・・・！？か、から！かりゃい！」

呂律が回っていない紗那の叫びが、家中に響き渡る。紗那は慌てた様子でコップに入っていた麦茶を飲み干す。

「し、舌がヒリヒリしゅる」

「やつぱり・・・澄香、今日はどんなタレにしたの？」
舌を出して苦しむ紗那を見て、凜が諦めたような顔で問う。

「どんなって、市販の焼肉のタレの辛口のやつと豆板醤混ぜただけ・・・だよ？」

「・・・豆板醤の分量は？」

「えっと・・・豆板醤に焼肉のタレをちよつとかけたくらい？」

「はあ・・・」

そうなのだ。澄香の味覚の嗜好は辛いほうにシフトしている。それも、豆板醤『を』加えるのではなく、豆板醤『に』加える程に。

「りん、みず！お水もってきれ！」

見ると、テーブルにあった冷水筒 容量2リットルで、つい先程までは麦茶が半分ほど入っていた が空っぽになっている。残っていた全てを紗那が飲んだのだろう。

だが、それでも紗那の舌の被害は収まっていないうだった。

満タンまで水を入れた冷水筒を凜が持つてくると、紗那はそれも凄い勢いで飲み干していく。

「紗那さん、大丈夫ですか？」

「・・・これだけ飲んでもまだヒリヒリする」

「そんな大げさな」

「澄香も、自分の味覚は分かってるでしょ？」

「・・・ごめんなさい」

場を和ませようと口を開いた澄香だったが、即座に切り捨てられしゅんとした様子になる。

そうして、歓迎会の夜は更けていく。

第6話 歓迎会（後書き）

*更新再開して、7話を投稿しました。大変お待たせして申し訳ありません。

第7話 夜中の訪問者

既に日も落ち、辺りに広がる夜の闇を建物の明かりや街灯が照らしている。

その明かりの一つ、とあるマンションを道から見上げる女性がいた。それ自体は別に不思議な事ではない。

ただ、その女性の衣服が特異だった。白の小袖と緋袴。巫女装束そのものだが、背中に紅葉の紋様が入っている点だけが微妙に違う。さらにおかしいのは、そんな格好の女性が道端に居るというのに、他の通行人がまったく気にしていない様子である事。

「森の埒はもぬけの殻。僅かに残った気配をなんとか辿ってみればこんな所とは……結界まで張っているようですし、まったくもって紗那殿は何を考えているのか分かりません」

ため息と共にそう呟いた女性は、見上げるマンションの入り口へと歩いていった。

ピンポン！

凜が夕食の後片付けをしている最中、来訪を告げるチャイム音が鳴った。

一階の共用玄関からではなく、戸別の玄関に設置されたインターホンからだ。

「こんな時間に誰だろ？」

「ボクが出るからいいよ。凜は片付け済ませちゃって」

後片付けを中断して対応しようとした凜を澄香が止め、チャンネルを適当に選んでいたテレビを消して玄関に向かう。

ちなみに紗那は、澄香の特製タレによってダウンしソファで横になっている。

「どちら様ですか？」

澄香が玄関のドア越しの来訪者に尋ねる。

「今日ここに引っ越してきた者です。荷物の整理に手間取って遅くなってしまったのですが、引越しのご挨拶をと思いまして」

ドアの覗き穴から見れば、そこに居たのはＴシャツとジーンズを着たラフな格好の若い女性。

相手の姿を確認した澄香は、取りあえずドアを開けようとする。

その瞬間、今までソファで横になっていた紗那が跳ね起きて叫ぶ。

「澄香！開けたら駄目！」

「は？」

突然の制止は間に合わず、既にドアは開けられていた。

「すみません。ちょっと待っててもらっ！？」

紗那の叫び声に気を取られていた澄香は、取りあえず来訪者の応対をしようと振り返った所で驚き、そのまま絶句する。

ほんの数秒前までＴシャツにジーンズという格好だった筈の女性が、今は神社の巫女さんのような格好をしていればそれも当然の事だろう。

そして、その女性は平然と家の中に上がり込む。

「やっと見つけましたよ、紗那殿。森の埒にいないので、数日かけて気配を辿って探し回りました」

女性が話し掛ける相手は驚く澄香ではない。

いつの間にかリビングからやって来ていた紗那がその相手だ。

「これくらいで撒けるとは思ってたけど………緋翠もしつこいね」

「しつこくもありません。敬愛するあの御方から与えられた任務ですから」

「戻るつもりはない、って何度も伝えたと思うけど？」

「それは承知しています。ですが、私も諦めるわけにもいきません」「ちよっと待った！」

言葉の応酬をする二人に、大声で澄香が割り込む。

「緋翠さん、って言いましたか？話を聞いている限りじゃ紗那の知り合いみたいだけど、あなた一体何者なんです？紗那と同じ妖狐族とかいう妖なの？」

緋翠と呼ばれた女性は、澄香のその言葉に反応した。澄香の方を一瞥した後に嘆息し、鋭い視線を紗那に向ける。

「……………呆れました。まさか人間に私達の正体を明かすとは」「そんな大げさな事じゃないわよ。一緒に暮らすっていうのに、自分の事を何も話さないのは礼儀に反するでしょう？」

「一緒に暮らす…………？」

紗那はその疑問に、何かと様子を見る為に傍まで来ていた凜と澄香に視線を送りながら答えた。

「ええ、この二人とね」

それを聞いた緋翠は、信じられないといった表情を見せる。

「長身で強気な女性と…………」

澄香に視線を送り。

「華奢で可憐な女性ですか…………」

凜に視線を送り。

「いつから、そういう趣味になったのですか？」

一瞬、周囲に沈黙が生まれた。

沈黙を破ったのは紗那の笑い声。

「……………ふふっ、あははっ　しゅ、趣味って……………くっ、ふふっ。駄目、息出来なく……………なりそ……………はははっ」

若干怒りを含んだ凜の声がそれに続く。

「僕は男です！」

「……………ご冗談を」

再び視線を向けた後に発せられた言葉に、凜は語気を弱めながらも主張を続けた。

「確かに体つきは華奢だし、女顔だし、おまけに声も高めですけど、男なんです」

「分かりました、信じましょう」

「・・・絶対信じてませんよね。棒読みですし・・・」

緋翠はこれ以上関わってられないとばかりに、凜を無視して言葉を紡ぐ。

「こちらの世界にいただけならまだしも、ただの一般人に我らの世界や種族の事を教えたとなれば話は別。お戻り下さい、紗那殿。今ならまだ、あの御方もお許しになるでしょう」

「あのね、何度も言ってるけど私とあいつは同格」

「ああ、もう！ちよつと待ったって言ったのに、人を無視して話を進めるな！」

紗那の言葉を途中で遮ったのは澄香の怒声。

「ええと、あなたの名前、緋翠・・・でいいの？もう緋翠って呼び捨てにするけど、他人の家に上がり込んで来て一体何のつもりなの？」

「私は紗那殿と話をしているのです。邪魔をしないで下さい」

「なっ・・・！？」

「貴女が扉を開けてくれたので、紗那殿がこの部屋に張っていた結界に進入出来ましたが、それ以外の役割は求めておりません。少し、静かにして頂きます」

そう言くと、緋翠の手が傍に居た澄香の額にすつと伸ばされる。

すると、いきなり腰が抜けたかのように澄香がその場にへたり込む。

「ふえ？あれ、何で・・・力、入んない」

「これ以上口を挟むようなら、今度はそちらの貴方も」

「緋翠」

緋翠が凜に対しても視線を向けた所で、紗那は普段より低めの声で緋翠の名を呼んだ。

「これ以上、この二人に、何かしてみなさい。その時は、今度こそ本気を出すわよ」

「・・・っ！？」

一瞬の内に、部屋中を凄まじい圧迫感が満ちていた。

敵意の対象になっていない凜や澄香でさえ息苦しさを感ずる程の圧

迫感。それを生み出しているのは紛れも無く紗那だ。

「引きなさい、緋翠。さつさとあっちに戻って、私の意思をあいつに伝えてくるのよ」

敵意を直接向けられている緋翠は、まさに蛇に睨まれた蛙のような状態となっていた。

それでも何とか、口を、体を動かそうとする。

「・・・・・・・・わ・・・・・・・・かりました。戻って・・・・・・・・あの御方に報告しましょう。紗那殿の力が鈍っていないと、確認出来ただけでも収穫にはなります」

「なら、すぐに行きなさい」

「・・・・・・・・はい」

表情を堅くして、背を向ける事を恐れているような様子ではあったが、その言葉に従って緋翠は玄関から出て行く。

そうして緋翠の姿が消えるのと同時に、辺りを満たしていた圧迫感も霧散した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふう。ごめんね、二人とも。驚かせちゃったね」

紗那は未だに固まったままの凜と澄香の二人を安心させるように笑いかける。だが、その笑顔には普段とは明らかに違う陰りが混ざっていた。

緋翠が去った後、家の中には居心地の悪い空気が流れていた。

「出て行ってもらうべきだよ！こんな訳の分からない、危険そうな事にボク達を巻き込んで！」

発端は澄香のこの主張。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、紗那がそれに対して口を噤んだままでいる事が問題を発展させていた。

「黙っているばかりじゃなくて、何か言ったらどうなの!？」

この一方的なやり取りも、もう何度も繰り返されている。

「澄香」

それまで二人のやり取りを傍観していた凜が、落ち着いた声で幼馴染の名を呼ぶ。

「なに!？」

「落ち着いて、澄香」

「ボクは落ち着いて……っ」

反射的に答えた自分の声が荒れている事を自覚し、澄香は途中で言葉を止めた。

「……ごめん。ボクはしばらく静かにしてるよ」

澄香が落ち着いたのを確認し、凜は紗那に向き直る。

「紗那さん」

「……」

凜の呼びかけにも紗那は黙ったまま。

「僕は、紗那さんに出て行ってもらおうなんて、これっぽっちも思っていない」

「え？」

その言葉を聞き、紗那がようやく反応を示す。

「だって紗那さんは、僕と澄香の事を守ろうとしてたじゃないですか」

「それは」

「ただ、説明して欲しいんです。それが無いと、僕も澄香も納得出来ません」

「……」

紗那はなお沈黙を続けていたが、それも凜の次の言葉までだった。

「正直言って奇妙な縁でしたけど、それでも、これから一緒にやっていきたいと思います。だから、話して下さい」

「……う……わたし……も」

震える声で、何とか言葉を絞り出そうとする。

「私も、凜や澄香と・・・一緒に・・・暮らし・・・たい」

「・・・僕もそう思ってます。話して、くれるんですね？」

まるで子供をあやす様に、涙ぐんだ紗那に声をかける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん」

少し時間をかけたが、紗那は確かに頷いた。

何となく良い雰囲気になりかけているそこへ、ずっと黙っていた澄香が口を開く。

「あー、ちよつといいかな？静かにしてるとは言っただけど、ここまですて入る隙が無いとは思わなかったんだけど・・・」

「ご、ごめん澄香！それで、何・・・かな？」

「はあ・・・本当は色々言っつもりだったんだけど、今のやり取り見てるとね・・・・・・・・確認しておくけど、凜はこれでいいのね？」

澄香は嘆息しながらも、凜の意思を確認する。

「僕はいいいけど・・・澄香こそいいの？一番ひどい目にあつたのは

澄香なんだから」

「それはもういいって。これで反対したら、ボクが悪者みたいじゃない」

少々なげやりな感ではあるが、澄香は肯定の意を示した。

「でも！話してもらうよ？さっきの緋翠とかいう女の人は何なのかって事を含めて、色々よね」

次の行動として、指を突き付けながら紗那の方に身を乗り出した。

それを受ける紗那は、先ほどまでの態度が嘘のようだ。真剣さが加わってはいるが、数時間前までのそれと大きく変わってはいいない。

「そうね、ちゃんと話すわ・・・長い話になるかもしれないけど、疑問に思った事があつたらすぐに言って」

「勿論そのつもり」

紗那は即答した澄香に対して苦笑をこぼすが、すぐに真面目な表情になる。

「まずは・・・・・・・・緋翠の事だよ」

その表情に合わせて、凜と澄香も身を引き締める。

「澄香がさっき言ってたけど、緋翠は私と同じ妖狐族。私の事を、妖界に連れ戻そうとしてるの」

「連れ戻すって、何ですか？」

凜が発した当然の疑問に、紗那の表情は一層真剣さを増していた。

「それを説明するには、妖界の事を話さないといけないね。・・・

・もう400年くらい前になるんだけど、妖界で戦があったの。

妖達の間では『大戦』と呼ばれている、妖界全体を巻き込んだ戦がね」

第7話 夜中の訪問者（後書き）

まずは、続きを待っていてくれた方々にお詫び申し上げます。大変お待たせしました。

年内とか年度内とか言いつつも、結局5月下旬になつてしまいました。リアルはひとまず落ち着きましたので、これからは週1くらいのペースで更新していきたいと思います。

さて、7話の内容ですが・・・一番最初にあつた伏線とすら言えない伏線を回収しました。緋翠ファンの人（いないか・・・w）は、これからまだまだ出てくる予定なので待っていて下さい。

7話投稿に合わせて、1～6話までも少し変更しました。

微妙な本文修正。更新が健在だった頃は携帯から見に来てくれる方が多かったので、携帯で見やすいように修正（と言っても、行の先頭に句読点が来ないようにした程度ですが）しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3956c/>

恋する狐と男の子

2010年10月9日06時19分発行